

追っていた背中が見えなくなった日

高崎市立入野中学校

三年 浦野 敬斗

朝なのに外は薄暗く、ものすごく厚い雲に覆われたある日、兄は家を出て行った。家族の心情を映し出すかのような、今にも雨が降りそうな空模様だった。兄は、家族一人ひとりに宛てた手紙を残して大学進学のために上京していったのである。何枚もの便せんにびつしりと丁寧な字で書き留めてある文章。これだけのものを家族全員に準備していたと思うと、読み始める前から涙なしではいられなかった。

「だから嫌なんだよ。そうやっていつだってかっこいいから。」

「大っ嫌い！」

四つ歳の離れた兄、小さな頃からたくさん一緒に遊んで数えきれないほど喧嘩もしてきた。きつと面倒だ

って見てもらっただろう。けれど、いつしか僕にとって煙たい存在になっていったことに違いない。

あれは、兄が小学校何年生の頃だっただろうか。友達の影響で空手を習い始めてから、どんどんと自信に満ちあふれていった。負けず嫌いで地道に努力できる性格だからこそ、上達していくことで自分は強いと自信をつけたのかもしれない。ただでさえ体の大きさも全く違うのに、何度喧嘩したって結果は決まっている。相手はジャイアンだ。いつだって僕はのび太でいるしかなかった。

泣かされてばかりいるなんて悔しい。絶対に強くなつて見返してやるという思いで、いつの日か僕も道場の門を叩いた。夏は、面の中がサウナのように滝汗を流しながら稽古をした。冬は、冷たい床で足の裏が真っ赤になって痛みに耐えながら稽古をした。それでも、勝つことなんて到底できない。その頃すでに兄は輝かしい真っ黒の帯を締めていたんだ。かっこいい。うらやましい……。

僕は何度も試験に挑戦したが、黒帯を締めることな

く空手を辞めることになった。勉強も運動も、絵だって字だって、楽器まで弾けて歌も上手い。何ひとつとして敵うものがない。同じ親から生まれているのに不公平じゃないかと神様を恨むほどだ。今は野球部に所属しているが、上達が遅くチームメイトの足を引っ張っている存在だ。

兄は出発の前日、荷づくりの手を止めて急にキャッチボールをしようと言った。受けたボールはなんだかいつもより重くて、グローブの中の手がしびれた。

「早く追いつけよ。追い越してくれよ。もたもたするなよ、待ってるから。」

そんな思いが込められていたような気がする。

みなさんには家族や友人など大切な人がたくさんいると思います。側にいられることが当たり前で、何も気づかないかもしれないですが、その大切な人たちとは限られた時間しか一緒に過ごせないということですね。想像以上に時が経つのは早く、時が経ってしまっただけから、ようやく今までの当たり前前の日々が特別な日々だったということに気づくことができるのです。

今が、かけがえのないものだということをぜひ考えてほしいと思います。そして当たり前にも隣にいる人がいつまでも隣にいるとは限らない。そう思っただけ大切な人との時間を大切にしたいです。

毎日何事もなく当たり前前に過ぎていく。そんな代わり映えのしない日々を、今この瞬間をどうか大切にしてください。

外は、穏やかな風が吹くさわやかな春の日。僕的心も清々しく晴れている。青空に浮かぶ雲の間から差し込む光は、きっと兄のこれからの未来を明るく照らしてくれているのだろう。兄の部屋は静けさを保っている。

時々掃除をしておくよ。

「大っ嫌い！」

なんじゃない。憧れていただけなんだ。いつか身長ぐらいは超えるかな。